

保育の造形表現領域における小麦粉粘土の特性を活かした造形活動

山 中 慶 子

Sculptural Activity Using the Special Qualities of Dough in the Field of Artistic Expression in Early Childhood Education

Keiko YAMANAKA

キーワード：小麦粉粘土、感触遊び、造形表現

1. 研究背景と目的

1-1. 保育3法令における領域「表現」

『幼稚園教育要領』における感性と表現に関する領域「表現」の内容では「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり作ったりなどする。」「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。」と記されている。また、『保育所保育指針』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』においても同様の内容が記されている¹⁾。

「表現」とは、“目に見えない心の内部を外部に表しだす”行為であるという。日常生活や保育の中で幼児がこれまでに体験したことや内的なイメージは、紙や絵の具、ペン、粘土、空き箱、砂などさまざまな表現の素材によって形を与えられる。幼児は作品を作っているだけではなく、素材の仲立ちによって心の内部を表しだしているといえる。また、ものに触発されて湧くイメージを表現しようとするとき、繰り返し試し、失敗したり再度挑戦したり、工夫してそれを克服する達成感を得ることもできる。造形的な表現活動は、自発的で制約のない遊びのような経験のチャンスを含んでいるとされる²⁾。

本稿では、幼児の表現の仲立ちとなる「素材」としての粘土の性質に着目し、幼児期に適切な活動内容、幼児が表現したいと自発的に思えるような保育者側の環境設定を検討する。

1-2. 造形表現活動と触感

私たち大人は言語や視覚による情報伝達に依存して生活しているが、その質を支えているのは身体感覚や情動の体験であるとされる。生まれてから体験した視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚の五感の豊かさは、造形表現だけでなく言葉や行動、感情にも影響を与える。幼児期に豊かな五感を育むことは、その後の発達に重要な意味を持ち、とりわけ、スキンシップなどの皮膚感覚への刺激が不足していると、後にさまざまな問題が生じることが指摘されていることから、触覚はあらゆる感覚の基盤になっているという²⁾。

造形表現の活動の中で触感を確かめながら創作できる素材のひとつに粘土があげられる。浅野は「乳幼児期の表現活動と図画工作を繋ぐ粘土活動の系統的な指導についての一考案」(2019)³⁾において、「小麦粉や片栗粉、米粉などをつかった感触遊びは、土や砂の遊びと同様に心理的欲求などの精神衛生を満たし、無目的で遊戯的な活動へ発展しやすい側面を持っている。この遊びを通しての体験が、材料へ興味や関心を持つきっかけとなり、手で触れたり全身で関わることで材料の性質理解や扱い方を自分なりに工夫したり、活動を展開していく可能性が生まれる」としている。

1-3. 粘土遊び

(1) 教育的意義

幼児期の造形活動で用いられる粘土には、自然素材の土粘土の他に、油粘土、紙粘土、小麦粘土などの人工粘土がある。こねる・のばす・丸める・つなぐなど手指を使った操作ができ、高い粘質により自在に変化もする性質をもつ粘土は、材質が乾燥し硬化しない限りは可逆操作ができるため、イメージしたものと異なる場合には何度もやり直しができる素材である。描画活動では、やり直したいと思った時には改めて白紙の紙から描き始めるか、上から塗りなおす作業が必要となるが、粘土活動においては、幼児の納得がいくまで試行錯誤を繰り返すことができるという利点がある。藤原は「粘土遊びの指導法に関する一考案」(2015)⁴⁾において粘土遊びの教育的意義を4つあげている。

① 身体機能や感性を高める

触る、握る、つまむ、引っ搔く、丸めるといった行為によって手や指の発達を促し、触覚的感性を高める。様々な刺激を受け取った脳は活発に活動して、より意欲的な活動を導くことになる。

② 創造性を育む

柔らかで扱いやすく、さまざまな形になる可塑性は形からの見立てを楽しむことができ、イメージを直ぐに具体的な形に表現できる。

③ 科学性を育む

幼児は、たたいたり延ばしたり丸めたりする行為によっておこる結果を確かめながら次の行為に発展させる。どうすれば強度が増すか、ヘラや型抜きをどう使えがよいかを考える。

④ 情緒を安定させる

素材の独特な手触りと、思いのままに形を変えることのできる特性は情緒的な安心感を与え、集団での造形活動は社会性を育む契機となる。

(2) 粘土遊びの現状

前嶋の調査によると、土の粘土を「年に一度は使用する」園は、18.2%。土の粘土を常備できている園は7.1%という状況にある。また個人用の粘土を保有している園は72.4%あったが、週に1

表1. 幼児の粘土活動の様子

<ul style="list-style-type: none"> ・粘土を小さくちぎり、親指、人差し指、中指で潰したり、こねたりする。 ・手のひらを使って、お団子状にまるめる。 ・手のひらでこすりながら棒状にのばす。 ・粘土板の上に置き、両手で転がしながら更に細長くする。 ・両掌で押しつぶす。 ・小さくちぎった粘土を、親指を使って粘土板にくっつける。 ・丸めた塊をヘラで切ったり、ヘラに突き刺したりする。 ・丸めた粘土を、何個も積み上げる。 ・平たくした粘土の上に、小さな粒を置いたり、ヘラで跡をつけたりする。 ・粘土板に強くおしつけ、粘土版の模様(凹凸)を写し取る。 ・友達の作っているものをまねする。 ・食べ物の形に見立てたものを作り、保育者に見せる。 ・作ったものが何に見えるか、保育者に問う。 ・粘土遊びの途中で手の匂いを嗅いで顔をしかめる。 ・まだ柔らかくなっていない(袋から出した状態のもの)にヘラで跡をつける。 ・ケース内の粘土の4分の1~3分の1程度の粘土を使用し、全てを使って造形遊びをする幼児はいない。
--

回以上使用する園は9.6%でしかないとしている⁵⁾。

筆者は、幼児(4~5歳児)が自由遊びの時間に好んで粘土遊び(個人用油粘土)をする姿を観察した。手指の動きや製作の内容を表1に挙げる。

油粘土は、乾燥しにくく適度な柔らかさが保たれるため管理がしやすい。比較的汚れにくく、幼児の造形表現に多く用いられている。小学校での図画工作でも油粘土が使用されることが多いことから、幼児期からその特性に触れ造形遊びを楽しむことは、体験の連続性という面からも意味のある事である。しかし、幼児期に多くの素材体験をするという観点からいえば、他の素材で粘土遊びを行うことも幼児にとって有意義だと考える。

一言で粘土といっても、多様な種類があり、それぞれの性質や特性は異なる。筆者が製作に使用した経験のある粘土を表2に示す。

表1の粘土活動の観察から、以下(a)~(c)のような改善点が見出された。

表 2. 保育で使われる粘土²⁾⁴⁾

	特徴	使用の際の注意点
土粘土	<ul style="list-style-type: none"> ・天然の土から出来ている粘土。 ・産地や色から名前がついている。 ・量感や心象性を表現できる粘土であり、水分量によって変化する素材性や手触りには特筆するものがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・乾燥すれば石のように硬くなるので、乾燥しないよう湿布をしてビニル袋に小分けしておくなどの管理が必要。 ・重量があり、持ち運ぶのが容易でないため保管場所が必要。
油粘土	<ul style="list-style-type: none"> ・水分を調節する必要がなく乾かない。固まらないので管理がしやすく園児の個人持ち物として最も一般的な粘土。 ・手につきにくく扱いやすいが硬さは湿度によって変化する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・油の匂いが不快感を与えることがある。
紙粘土	<ul style="list-style-type: none"> ・紙を細かく裁断して糊などを加えて手作りすることができる。 ・水彩絵の具での着色や、ニスを塗って作品保存することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・水分が蒸発すると固くなるので、柔らかいうちに成型する。
小麦粉粘土	<ul style="list-style-type: none"> ・安全で安心な粘土で、作る過程が楽しい。 ・入手しやすく安価であり、柔らかさや手触りの良さ、水に溶けるもので色を練りこむことが容易といった特徴がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小麦アレルギーというリスクを考慮する。 ・保管して使用することは難しいが、オープンなどで焼成すると作品として保存できる。
テラコッタ粘土	<ul style="list-style-type: none"> ・土粘土の一種 ・焼くとレンガ色に仕上がり、透水性がある。 	

- (a) 未使用の粘土が多く残っている幼児がいた。油粘土は揉むと柔らかくなるが、大きな塊は、手指の力が弱い幼児では柔らかくするのが難しい。手指の力の弱い幼児でも扱いやすい粘土が望ましい。
- (b) イメージからの製作や見立ての造形が少なく、形が単一的である。単色粘土は、本人の想像からの造形が他者に伝わりにくい。幼児のイメージや表現を豊かにすると考えられる色彩のある粘土が望ましい。
- (c) 造形の基礎となる技術（手指の動きや工夫の仕方）や創造力に個人差があり、次々形を生み出す子もいれば、すぐに飽きてしまう子もいる。幼児期に適切な活動内容と、幼児が表現したいと自発的に思えるような環境設定が望ましい。

神谷 (2009)⁶⁾は幼児期の粘土遊びでは初めに目的を設けない粘土遊び（発達に照らし合わせた技法の段階的な取り組み）をこなすことで楽しみながら基礎的な粘土の操作を身につけ、その上で生

活経験と結び付けられる物語など、個々のイメージを豊かにする題材を設定していく活動方法が表現の広がりや発展に有効だとしている。

また藤原は、幼児の遊びは発達に伴って、一人遊び→平行遊び→連合遊び→共同遊びへと変容していき、このような各段階においてどのような粘土遊びが好ましいかを表3のように示している⁴⁾。

表 3. 粘土遊びの指導方法⁴⁾

一人遊びの段階	感触遊び	小	<ul style="list-style-type: none"> ・寒天・片栗粉スライムなどの素材を触る ・少量柔らかめの粘土
平行遊びの段階	技法遊び	↑ ↑	<ul style="list-style-type: none"> ・手指をしっかり使う
連合遊びの段階	自由制作	イメージの共有 ↓ ↓	<ul style="list-style-type: none"> ・へらなどの用具や補助材を使用
共同遊びの段階	目的制作	大	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいに応じて広い場所で多量の粘土を使用

1-4. 小麦粉粘土の有用性

本稿の粘土遊びでは、前項で推測された改善点(a)(b)を考え合わせて、小麦粉粘土を使用することとする。

松崎ら(2016)は、「小麦粉粘土における幼児のオノマトペ」の中で、「小麦粉粘土は小麦粉を水で練って粘土状にしたもので、完成状態の粘土は一定の弾力があり、手触りは滑らかで良好である。素材の特質から低年齢児に有効性が見られるが、緻密な作品制作ではなく、素材との関わりを楽しむことに主眼を置くならば、年中、年長児でも小麦粉粘土のほうが有効である」としている⁷⁾。

また、小麦粉粘土は水に溶ける物で色を練りこむことができ、発色がきれいなのも特徴である。いつもは単色粘土を使用している幼児にとって、様々な色のついた粘土は想像をふくらませ、創造する意欲につながるきっかけになることと推測する。小さく丸めた単色の粘土を保育者がみても、幼児が何を想像して形作ったのか分からないことが多いが、赤い丸なら「トマト」黄色い丸なら「月」緑なら「豆」白なら「お団子」といった連想が容易になる。また、小麦粉粘土の柔らかく練りやすい性質から、色を混ぜてマーブル状にしたり、他の色を作ったりする展開も予想される。

1-5. 研究目的

前項で推測された改善点(c)から、本稿では、「テーマを設けた造形活動」と「自由な造形活動」を実践し、幼児の活動内容を調査して、幼児期に適切な活動内容、幼児が表現したいと自発的に思えるような保育者側の環境設定を検討する。

2. 研究方法と結果

年中児(4、5歳児)2クラスにおいて、別日に小麦粉粘土活動を行った。粉から小麦粉粘土を作るまでの活動は2クラス同じ活動計画をたて、粉から粘質に変わる形態の感触を体感させた。その後、Aクラスは、テーマを設けた造形活動へ。Bクラスは、自由な造形活動へと展開した。活動計画を表4・表5に示す。

2-1. 小麦粉粘土をつくる活動

事前に食紅を混ぜて計量しておいた小麦粉を、各グループのボウルに入れ、触ってみよう促した。「サラサラ」「ふわふわ」「ふっふわ」「お餅みたいな匂い」「クリームみたい」「気持ちいい」などの発語が聞かれた。

水を足すと、食紅が溶け各ボウルに色が現れた。「あ、赤になった」と手を入れ混ぜ始めた。指先だけで触ろうとしたり、手首までドロドロになりながら混ぜる幼児もいた。「ベチャベチャー」「どろどろ」「気持ち悪い」「面白いよ」「粘土にならない」「あ、なんだか固まってきた」など反応はさまざまであった(写真1)。中にはすぐ「手あらってきてもいい？」と言う幼児や、なかなか触ろうとしない幼児もいた。

次第に水気がなくなり、粘土の形態に変化していくと、ほとんどの幼児が積極的に触りだし、両手でこねたり、「こうしたら柔らかくなるよ」と教えあい、両手に握れる量を包むように揉んだりする姿が見られた(写真2)。



写真1. 小麦粉に水を入れた直後の様子



写真2. 完成した小麦粉粘土を触る様子

表4. テーマを設けた造形活動計画

造形表現活動計画		対象：年中児 20 名		
活動名 食べたいな！こんなお弁当	子どもの実態・育ちの願い： 保育の中で、粘土あそびによく使われるには単色の油粘土である。小麦粉でつくるカラフルな色粘土から食材を連想し、自分だけのお弁当作りに挑戦する。モチーフの形や色を思い出しながらかお弁当を想像し、表現する楽しさを感じる。			
ねらい：変化する小麦粘土の触り心地を体感し、モチーフの形や色を思いだしながらか造形表現を楽しむ。				
内容 ○小麦粉に水を加えて粘土に変わっていく触感を楽しむ。 ○カラフルな粘土から想像を膨らませ、自分だけの「お弁当づくり」に挑戦する。 ○出来上がった作品を見せ合ったり、模倣したりしながら仲間と一緒に作る楽しさを味わう。				
材料・用具	環境構成	時間	子どもの活動／予想される動き	保育者の援助
小麦粉 水・油 食紅（赤・青・黄・緑・黒） ボウル（大） 濡れタオル	○スモックを着用 ○1つの机に4人がけ。 机に1つずつボウルを置いておく。（机×5） ○手拭き用の濡れタオル（各机1枚） ○小麦粉、水、油、を分量ごとに分け、色を粉に混ぜておく。各グループに1色ずつの5色。（赤・紫・黄・緑・黒） ※白と、各色 200gは保育者が事前に作っておく。 ※青の食材はないので紫を用意する。 ・小麦粉（200g） ・水（100cc～120cc） ・油（少量）	0:00 0:05 0:20 0:50 1:00	●汚れても良い服装に着替える。またはスモック着用。 ●小麦粉・水・油をみて「料理」を連想する。 ●小麦粉に水を加えていく。サラサラの触感から、ベタベタ、ネバネバと変化し、粘質になっていく様を楽しむ。 ●中にはベタベタの触感を嫌がる子も。 ●上手くまとまらなかったり、粉が飛び散ったりしながらも、工夫して耳たぶくらいの固さになるまで、こねたりませたりする。 ●各グループの小麦粉粘土ができれば、5つに分ける。 ●赤・紫・黄・緑・黒・白の6色小麦粉粘土を4人で分け合いながら「お弁当づくり」に挑戦する。 ●保育者が用意した容器・トレイなどの中から、自分のイメージにあうお弁当箱を選ぶ。 ●保育者が用意した道具や材料を見て、「お弁当」の想像を広げ、製作に取り組む。 ●色の違う粘土をまぜたらどうなる？違う色で包んだらどうなる？他の色は作れないかな。などの疑問を試してみる。	■各机に小麦粉を配り、「さあ、今から何を作るでしょう」という問いかけをする。 ■今から粘土遊びをすることを伝え、小麦粉粘土の作り方を説明する。 ■少しずつ水を加える。油も少量加える。 ■触るのに抵抗がある子には、少しまとまった頃に触れてみるよう促す。 ■粉が飛び散らないように、やさしく混ぜる、こねるという動作を指導する。 ■各機の粘土がうまくまとまるように、援助をする。 ■粘土を各グループ内で均等に分け合えるよう言葉かけをする。 ■「〇〇にみえるね」「おいしそう」などの言葉かけをする。 ■なかなか手が動かない子には、「お弁当に、どんなおかずが入っているかな。」「何がすき？」など言葉かけをする。 ■「こんな材料もあるよ」と補助材があることを伝える。 ■片付けの指示。 ■小麦粘土活動で感じたことを幼児に問い、今後の造形活動につなげる。
粘土板 粘土ペラ	○粘土板を用意する ○幼児の想像を広げる材料を準備しておく ・ブラパック ・ブラ丸容器 ・アルミカップ ・つまようじ ・色紙 ・バラン など			
注意書き	○保護者あてに、小麦粉粘土の特性を書いた用紙を準備しておく。（冷蔵庫で数日は保管が可能。口に入れても害はないが、故意に食べないように注意する。）			

2-2. テーマを設けた造形活動

Aクラスの活動テーマは「食べたいな！こんなお弁当」とした。プラスチックパックに小麦粉粘土でお弁当作りをする造形活動を設定した。T幼稚園では、週に2回お弁当の日を設けていることから、幼児にとって馴染みがありイメージしやすい内容を考えた。プラスチックパックは、大、小、丸型を選べるようにし、おかずカップや爪楊枝なども自由に使えるよう置いた（活動計画 表4）。

お弁当作りのテーマを提示し作り始めてよいことを伝えると、ほとんどの幼児がすぐに製作に取り組んだ。パックは、大きめのものが人気で、1段作り終えたら、2段弁当にしても良いことを伝えた。

幼児の作品を以下に挙げる。

- 白い粘土の上に赤い粘土をマグロに見立て、黄色い粘土を玉子に見立てた寿司弁当を製作した。まわりには海苔をまいた（写真3）。
- 白い粘土を小さく粒状にして米を表現したり、両手で転がしながら麺を作ったりした（写真4）。
- おかずカップで粘土をつつんで餃子を表現した（写真5）。
- つまんだり、丸めたり、押しつぶしたり、細長くのばしたりしながら食材を表現した。
- 友達のマねをした。
- 米粒に見立てた小さくちぎった白い粘土を敷き詰め、最後に色のついた粘土で彩りを加えた。
- 色々な丸を作った。トマト、おにぎり、ブドウ、デザートを表現した（写真6）。
- 白い粘土の中には、黒い粘土が入っている。あんこ餅を表現した（写真7）。
- 赤で作った苺に粒をつけて、それを白い粘土で包んだ。いちご大福を表現した。
- 年中組で栽培をして、1週間前に収穫した二十日大根（ラディッシュ）を表現した（写真8）。

製作の時間は約40分間であった。最後まで集中が続き、3kgの小麦粉を使った粘土もほとんど無くなった。個々の製作に工夫（爪楊枝で刺して繋げる、他の色で包む、小さくちぎった粘土をカップに入れる等）が見られ、細かな装飾や色合いを

考えて作られていた。感想では、「お寿司を作るのが楽しかった。」「ちゅるちゅる（麺）を作るのが面白かった」「お団子を作るのが楽しかった」など、具体的な感想が多かった。



写真3. 玉子寿司を表現した



写真4. 麺を表現する様子



写真5. 餃子を表現した



写真6. 丸い食材を表現した



写真7. 黒粘土を白粘土で包んだ



写真8. 二十日大根を表現した

表5. 自由な造形活動計画

造形表現活動計画		対象：年中児 20 名		
活動名 カラフル粘土であそぼう	子どもの実態・育ちの願い： 保育の中で、粘土あそびによく使われるには単色の油粘土である。小麦粉でつくるカラフルな色粘土から想像を膨らませ、自分の作りたいものを作る楽しさを感じ、仲間と表現を共有する喜びを味わう。			
ねらい：変化する小麦粘土の触り心地を体感し、想像を膨らませながら自由な造形表現を楽しむ。				
内容 ○小麦粉に水を加えて粘土に変わっていく触感を楽しむ。 ○カラフルな粘土から想像を膨らませ、自由に製作する。 ○出来上がった作品を見せ合ったり、模倣したりしながら、仲間と造形表現を共有する楽しさを味わう。				
材料・用具	環境構成	時間	子どもの活動／予想される動き	保育者の援助
小麦粉 水・油 食紅（赤・青・黄・緑・黒） ボウル（大） 濡れタオル	○スモックを着用 ○1つの机に4人がけ。机に1つずつボウルを置いておく。（机×5） ○手拭き用の濡れタオル（各机1枚） ○小麦粉、水、油、を分量ごとに分け、色を粉に混ぜておく。各グループに1色ずつの5色。（赤・青・黄・緑・黒） ※白と、各色200gは保育者が事前に作る ・小麦粉（200g） ・水（100cc～120cc） ・油（少量）	0:00 0:05	●汚れても良い服装に着替える。またはスモック着用。 ●小麦粉・水・油をみて「料理」を連想する。 ●小麦粉に水を加えていく。サラサラの触感から、ベタベタ、ネバネバと変化し、粘質になっていく様を楽しむ。 ●中にはベタベタの触感を嫌がる子も。 ●上手くまとまらなかったり、粉が飛び散ったりしながらも、工夫して耳たぶくらいの固さになるまで、こねたりませたりする。 ●各グループの小麦粉粘土ができれば、5つに分ける。	■各机に小麦粉を配り、「さあ、今から何を作るでしょう」という問いかけをする。 ■今から粘土遊びをすることを伝え、小麦粉粘土の作り方を説明する。 ■少しずつ水を加え、油も保育者が各ボウルに加える。 ■触るのに抵抗がある子には、少しまとまった頃に触れてみるよう促す。 ■粉が飛び散らないように、やさしく混ぜる、こねるという動作を指導する。 ■各機の粘土がうまくまとまるように、援助をする。
粘土板 粘土ペラ	○粘土板を用意する	0:20	●赤・青・黄・緑・黒・白の6色小麦粉粘土を4人で分け合いながら自分の作りたいものをつくる。 ●動物、食べ物、キャラクター、乗り物、植物、形、など油粘土では表現できない色彩に特徴がある対象を製作する。 ●色の違う粘土をまぜたらどうなる？違う色で包んだらどうなる？他の色は作れないかな。などの疑問を試してみる。	■粘土を各グループ内で均等に分け合えるよう言葉かけをする。 ■「○○にみえるね」や、「何作っているの？」などの言葉かけをする。「○○作って見たら？」などの提案は控える。 ■触感あそびを楽しんでいる子には、どんな感触が聞いている。無理に形を作らなくても良い。
ブラパック 注意書き	○ブラパックを準備する ○保護者あてに、小麦粉粘土の特性を書いた用紙を準備しておく。（冷蔵庫で数日は保管が可能。口に入れても害はないが、故意に食べないよう注意する。）	0:50 1:00	●友達の作品を見たり、自分が作ったものを保育者に見せたりする。 ●片付け。できた作品を持って帰りたい場合は、プラトレイに入れて持ち帰る。 ●保育者、友達と感想を伝えあう。	■片付けの指示。 ■小麦粘土活動で感じたことを幼児に問い、今後の造形活動につなげる。

2-3. テーマを設けない造形活動

Bクラスは、テーマを設けない自由な造形活動とした。小麦粉粘土の各色を机ごとに分け、小麦粉粘土遊びを開始した（活動計画 表5）。

活動が始まると、好きな色の粘土を大量にちぎって遊ぶ幼児や、どの色を取ろうか迷う幼児、どの色も少しずつ取って粘土板に並べていく幼児など、反応はさまざまであった。最初の製作物を作り始める前に、粘土の色を混ぜ合わせて遊ぶ幼児が数名いた。

幼児の活動を以下に挙げる。

- 色と色を混ぜた。
- 大きな塊を伸ばして遊んだ（写真9）（写真10）。
- いろいろな色を丸めて並べた。赤色と白色の粘土でピンク色を作り、その上に色のをせた。
- 赤と青を混ぜたら、濃い紫ができた。自分で混ぜた色で野菜を表現した。
- 作っては壊し、色を混ぜ、また違うものを作った。色合いも変化していった（写真11～17）。
- 粘土の重さ比べをした（写真18）。
- 全部の色を混ぜてマール状にした。
- パックに入れて転がして遊んだ。

テーマを設けず自由に製作をしたBクラスでは、活動内容に個人差がでた。大きな塊を作って最後までそのボール（塊）で遊ぶ幼児や、最後まで色混ぜをする幼児もいた。制作したものを壊し、次々異なる形に変化させていく幼児もいた。製作は前半で終わり、他の子と比べっこや粘土の交換などをする幼児もいた。

粘土は、全部使ってしまったグループと沢山余ったグループ、両極端であった。感想は「粘土で遊んだのが楽しかった」と抽象的であった。粘土を単色で使うよりも、2種類以上混ぜている幼児が多く見られた。



写真9. 粘土を伸ばす幼児



写真10. 大きな塊で形を作る様子



写真11. 虹



写真15. 虹



写真12. リボン



写真16. 色を混ぜる



写真13. お母さん



写真17. ケーキセット



写真14. 虫



写真18. 重さ比べをする様子

3. 考察

3-1. 「テーマを設けた造形活動」と「自由な造形活動」の結果

Aクラスの活動では、「お弁当をつくる」という目標が定まっていたため、作ったものを壊すという行為はほとんど見受けられなかった。どうしたら本物のように見えるかの工夫（例えば、粘土を小さくちぎって丸めて米粒を作る。赤や黄色の丸に緑のヘタをつけてミニトマトにする等）を個々で考えたり、友達の作るものを真似たりしながら、幼児自身が持ち得る技術でお弁当を完成させた。自分が今まで見てきたものや、経験したことを組み合わせ、外に向かって自己を表現する活動であったといえる。

Bクラスの自由な造形活動では、「これを作ろう」という目標に向かうよりも、遊戯的な感触遊びの傾向が強かった。小さな丸をたくさんついたり、両手いっぱい大きな塊をのばしたり、色を混ぜたりしながら、自分の気持ちの思うままに粘土遊びを行ない、作っては壊した違う形へと変化させた。活動最後に出来上がった作品を見ると、数種の色が混ざった団子状の作品が多かった。しかし、活動の途中で現れた色の混ざりや、変化していった形は幼児の中に体験として残っていると推測される。

クラスの中には、粘土での活動は早くに終わり別の遊びをする幼児がいた。粘土活動での展開を考えるならば、段階を追って使用してよい補助材（クッキー型やストロー、ペットボトルキャップ他）を置くなどの刺激があれば、集中が続かない子どもイメージを膨らませて活動に取り組むことができたのではないかと考える。

3-2. 小麦粉粘土を使用した結果

(a) 柔らかさについて

小麦粉粘土を作る工程では触感が苦手と捉えられる幼児もいたが、粘土の形態になったものは、活動中全ての幼児が常に握ったりこねたりしながら触れていた。幼児の手指に心地良い刺激であったと考える。特に、大きな塊を両手でのばしたり、両掌でダイナミックに形作ったりすることは、柔

らかで弾力のある小麦粉粘土ならではの造形表現である。細くのばした形状も切れることなく保たれていた。表現者にとって扱いやすい素材は、幼児の創造の意欲を持続させ、次々と頭に浮かぶものを表現できる喜びを味わわせてくれると推測される。松崎らの指摘する「小麦粉粘土の応答性の高さ」⁷⁾を裏付ける結果となった。

しかし、小麦粉粘土は空気に触れると固くなり、冷蔵庫に保管しても数日しか使用することができない。幼児が園で常用する粘土は、油粘土が適していると考えられる。

(b) 有彩色について

いつもは単色粘土を扱っている幼児にとって、鮮やかな色の粘土は創造意欲の高まるものと推測される。しかし今回の2クラスでは、色彩への興味の視点が異なっていた。

Aクラスの活動では、「お弁当を作る」というテーマが定まっていたため、幼児は色をさまざまな食材に結び付けて考え、色から連想し、自分が作りたい対象を決めて製作に取り組んだ。食材の形や色合いを思い出し、次々に食材を生み出していく援助をしたのは、粘土の色彩の力が大きいと考えられる。「見て見て。」「○○作ったよ。」「私のお弁当にいつもお母さんが入ってる。」などの発語が聞かれた。製作したものが、「そのものらしく見える」というのは、達成感にもつながる喜びであると推測する。

Bクラスのテーマを設けない造形活動では「色から何かを連想する」よりも、「色を混ぜてみたい」「色で遊びたい」といった傾向がみられた。粘土の色は絵の具のように容易には混ざらず、マーブル状になる。その色の形を観察したり、更に他の色を加えたりしながら遊ぶ様子がみられた。手指で根気よくこねていくと別の色になる。「新しい色を作る」というのは、Aクラスの活動ではほとんど見られなかった表現である。

4. まとめ

本稿では、幼児期に適切な活動内容、幼児が表現したいと自発的に思えるような保育者側の環境設定を検討するため、小麦粉粘土の性質に着目し、「テーマを設けた造形活動」と「(テーマを設けない)自由な造形活動」を実践した。得られた結果を以下に示す。

- (1) 粘土に色彩があることは、テーマを設けた活動では作りたいモチーフを連想させる材料となる。テーマを設けない造形活動では「色で遊ぶ」「色を混ぜる」という傾向が強い。
- (2) テーマを設けた活動では、作ったものを壊すことはほとんどなく、自分の経験やイメージを表現しようと工夫する姿が見られた。
- (3) 自由な造形活動では、作っては壊し、また作るといった遊戯的な感触遊びを繰り返す姿が見られた。

本稿の実践「テーマを設けた活動」及び「(テーマを設けない)自由な造形活動」では、幼児が指先や掌を使って工夫し、自発的に活動に取り組んだことから、どちらも幼児期に有意義な造形表現活動と考えられる。目的や年齢に応じた活動内容や粘土の選択、補助材などの環境設定について、今後も研究を深めていきたい。

註

- 1) 『平成29年告示幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領』チャイルド本社(2017) pp.20-21, pp.48-49, pp.87-88
- 2) 槇英子(2008)『保育をひらく造形』萌文書林 p.9, p.13, p.16, p.39
- 3) 浅野卓司(2019)「乳幼児の表現活動と図画工作を繋ぐ粘土活動の系統的な指導についての一考案」『桜花学園大学保育学部研究紀』要第19号 p.3
- 4) 藤原逸樹(2015)「粘土遊びの指導法に関する一考案」『安田女子大学紀要』pp.192-193, p.198
- 5) 前嶋英輝(2016)「幼児のための粘土遊びの設備の構築」『吉備国際大学研究紀要』(人文・社会科学系)第29号 p.64
- 6) 神谷睦代(2009)「幼児の粘土造形-基礎的な技能の習得及び題材(テーマ)についての実践と検証-」『美術教育学 美術家教育学会誌』第30号 pp.175-189
- 7) 松崎史周、桐川敦子、望月久也(2016)「小麦粉粘土活動における幼児のオノマトペ」『日本女子体育大学紀要』pp.94-95